第九回　正月・ひま

お正月ってなんだっけ？

何年か前、大晦日に宅配便を出しに行ったことがありました。一日に着くでしょうと言われ、はたと思いました。正月一日から仕事だなんて大変だなあ。あれ？　自分がそうさせてるんじゃないか！

そういえば、少し前までは初売りは一月二日だったのに、いつのまにか一月一日からしているお店も多くなりました。正月まで働いたら、一体いつ休むのだろう。

かつてお正月は、年神（トシガミ）をむかえる祭だったようです。「年」と「神様」とのつながりがピンと来ないかもしれませんが、新しい年をむかえる時に神聖なものを感じることができたということでしょう。それにくわえて、昔は数え年といって、お正月にみな一つ歳をとったので、年があらたまることと自分が年を重ねることが一つに祝われたわけです。

昔の日本人は時間に質の違いを感じとって、「ハレとケ」というふうに言い表してきました。ハレとは、祭や儀礼などのおこなわれる特別な日、聖なるもの、非日常であり、ケは日常生活のこと。日常生活をいとなむエネルギーが枯れてくると「ケガレ」となってくるので、「ハレ」の行事などでまたそれを浄化したわけです。

ハレの日にはハレの日にふさわしい過ごしかたや演出があります。しめ縄は神の占める場所のことですし、お節料理も年神に供え、神と人が共に同じものを食べるというハレの日の食事という意味があります。

神様をお迎えするのだから、労働という日常をいったん中断して、閑（ひま）を過ごすことが、ハレの日にふさわしい人間のありかたでした。おせち料理も、台所に立たなくていいよう、保存食の意味もあり、閑を確保するための道具立てであったわけです。

みなさん、お正月はどのようにお過ごしでしたでしょうか。近年のお正月は、神聖どころではなく、特別な日という感じさえ薄れていってるように思うのは私だけでしょうか。

せっかく仕事が休みなのに、だからといって家にいてものんびりできない。家族でゆっくりお家でだんらんをなどと思っても、時間をもてあまして、結局人ごみの中へ行って買い物している。

今や、閑はつぶすべきもの。つぶす手段は消費。それほど、私たちは消費者の烙印が強く押された生き物になってしまいました。

お金をつかい、時間を使い、失っているのはもっと大きいもの。特別な日もいつもと変わらないことをして、結局、生活にメリハリがなく単調で一様で、それでもそこそこ満ち足りてるがために、潜行する退屈。

二十世紀を代表する宗教哲学者は言いました。現代社会を突き動かす魔の力を止めるものがあるとしたら、それは「本当の閑暇を人間が知ること以外にない」（西谷啓治）と。傾聴すべき言葉だと思われます。